


王子さまの守り人 2

遊森謡子

Utako Yumori

RB

レジーナ文庫



登場人物
紹介

カザブカ▶

人間と神の橋渡し役と
言われる神秘の鳥。

▲ エンディ

王子の義兄である
王太子の護衛士。
職務に忠実で無愛想。

▲ カティア

大貴族メゼック一族
の娘。本人は王子と
仲がよいのだが……

▲ イディン

王太子の主治医。
人当たりはいいが、
少々屈折している。

▲ ファシード

国王の第二夫人の弟で、
貿易会社社長。豪快な
性格のプレイボーイ。

ラスト▲

シーノス
王子の主治医で、“星心術士”
頭は切れるがやや皮肉屋。

▲ カザム

王子の住む離宮を
守る護衛士。
穏やかで少し
天然の気あり。

もりお
森男▶

シーノ
ラストの星心術で
カザムが変身した
ふかふかの大型生物。

▲ 王子

ウィオ・リゾナ王国の王子。
母は国王の第二夫人。
少し不思議な力を持っている。

ひのこうめ
▲ 日野小梅

三人姉妹の長女で、
年の離れた末妹を
育てた経験あり。
トリップした異世界で
小さな王子さまの
お世話をしている。

目次

王子さまの守り人2	7
番外編 乳母さまの守り人	287
書き下ろし番外編 一人で買い物、やっぱりトラブル	339

王子さまの守り人 2

第一章 子どもの友情、大人の警戒

一日一日を夢中で過ごすうちに、流れるように日々は過ぎていく。

春らしくなってきたなあと思っていたら、いつの間にか真夏の強さに変わった陽射しが、ウイオ・リゾナ王国北部の大地に降り注いでいた。

シズ・カグナ離宮の正門を出て、丘陵地帯へと続く並木道を歩く。中天からの太陽に照らされて並木の短い影が等間隔に落ち、そこを金髪頭の小さな男の子——この国の王子さま——がびよんびよんと飛び跳ねるように踏んでいく。すぐ後ろに、護衛士の黒い制服姿のカザムさんがついているので安心だ。

「こんな身軽でいいなんて、なんだか逆に心配」

私は独り言のように言いながら、自分の格好を見下ろした。

紺のジャンパースカートにブラウスは、乳母の制服みたいなもの。本当はエプロンと、頭にピンでとめるレースのボンネットもあるんだけど、外出中の今は外して荷物の中に

入れてある。代わりに、大きなつばのある帽子をかぶっていた。

私と並んで歩いているラストさんが、銀縁の眼鏡の向こうにある金茶の瞳を細めた。

長身を屈めて、

「もつと軽装で転移したことだつてあるじゃないか。診察着一枚でな」

と私にだけ聞こえるように小声で言う。私は思わず笑い出した。

「そんなこともありましたね。……なんだかもう、ずいぶん前のことみたい。こつちに来てから、まだたったの一年半なのに」

前方を行くカザムさんが、枯れ草色の髪を揺らして振り向く。優しいダークグリーン

の瞳が、同意するように私を見た。

私の名は、日野小梅、という。日本で生まれ、日本で二十五年間育った私が、現在この世界ガデュエリオンで暮らしているのには訳がある。

一年半ほど前のこと。ガデュエリオンに存在するウイオ・リゾナ王国のとある場所と、日本とが一時的につながった時の事故で、私はこちらの世界に引っぱり込まれてしまったのだ。

その頃、ウイオ・リゾナ王家ではお家騒動がかなりこじれていた。おかげで国王の第

二夫人の子である王子は、まだお母さんのお腹なかにいる頃から命を狙われていた。そんな状況の中で生まれた王子を、ひよんなことから私が保護したのだ。まだ新生児だった、赤ちゃん王子を！

私は独身で、子どもを産んだこともなかったけれど、十六歳年下の妹がいる。その妹、七緒ななちを世話した時の経験を元に、悪戦苦闘しつつも半年にわたって、一人で赤ちゃん王子のお世話をするようになった。

最初、私はその赤ちゃんが王子殿下だなんて全然知らなかった。単に名前がないと不便だから、男の子を持つ親が「うちの王子さま」って呼ぶような感覚で、「王子」って呼んでただけなんだよね。後で本当の王子さまだって知った時は、もうびっくりしたな。やがて王子は身元を隠し、王位継承権を持たない養子として第二夫人のもとへ引き取られた。こちらの子どもは生まれた時に、まず幼名幼みょうをもらう。王子の場合は私が日本語で「王子」と呼んでいたのをそのまま幼名として、こちらの人にも「オージ」と呼ばれることになった。

そして私自身もすったもんだの末、こちらの世界の人間として神さまに認められた。

こちらの人はみんな左手の薬指に、自分の名前を表す印が刻まれているんだけど、私もその印をもらったのだ。そのおかげで、地球から来たという事実を隠してはいるものの、

王子の乳母うぼとして離宮で一緒に暮らせることになった。

今、王子と一緒に歩いている護衛士護衛士カザムさんと、王子の主治医であり、星心術シシノという魔法のような術を使えるラズトさんは、そういった事情を全て知っている。彼らと、その他私を含む数人は、複雑な生い立ちを抱えた王子を守る仲間なのだ。

「オージは、明日参加する王国恒久平和祈念恒久平和祈念の礼拝が何なのか、理解したのかな。オレなりに説明はしたんだが、ふーん、って感じだったぞ」

王子の教育係でもあるラズトさんが、わずかに苦笑する。
ラズトさん、人前では王子に対して敬語を使うけれど、こうして王子を守る仲間の前ではついついタメ口になるみたい。

「大丈夫みたいですよ。今朝聞いてみたら、『ちちうえの国がずっと続きますよいうって、お祈りするんでしょ』って言ってましたし」

私はうなずいて、こちらに手を振る王子に手を振り返した。

そう、王子はこれから公務のため、ウイオ・リゾナ王国の王都であるリゾンテアの王城に向かっているところだ。

移動手段は、魔法陣。こちらでは魔法という言葉は使わないので、『転移陣』と呼ぶ。転移陣で空間を転移するには、様々な制約がある。転移陣を組むのは『星心術』の中でも難しい術で、できる人はそれほど多くない。だからこそ、術を使える人を雇えるお金持ちだけが得をしたり、犯罪に使われたりしないようにしたいといけなわけね。

一番大きな制約は、「公務でのみ使用可」というもの。『星心術』を使う人は日本という自動車免許みたいなもの取得するんだけど、違反すると点数を引かれて、それに応じた罰則もあるし、場合によっては免許取り消しとかになるんだって。今日は王子が公務のために王城に向かうので、付き添いの私たちも一緒に転移陣で移動できる。本当なら、離宮の敷地内から王城の敷地内へ直接転移してしまうのが一番早い。でも、それはできないんだよ。そもそも、重要な建物とその周辺には『星心術』でセキユリティが張り巡らされていて、侵略者や犯罪者が入り込めないように、直接転移はできないようになってる。特に、王城とその周辺はかなり広範囲にわたって転移の『星心術』が使えず、王都の中にすら術で移動することはできない。

だから私たちも、離宮から離れたポイントから、王都の近くのポイントまで転移しようとしているわけね。転移先のポイントは防犯のため毎回変える必要があって、今回指定したポイントにはすでに王城の護衛士たちが迎えに来ているはずだ。

ちなみに一度に転移できる人数も制限されていて、今回は王子に乳母^{うは}の私、侍女のローレン、カザムさん、ラズトさんの五人での転移だ。途中までの護衛と荷物運びのために、さらに二人の護衛士が、インパラに似たアンピイという動物に乗って後ろについてくれる。

離宮から続く並木道が途切れた先からは、転移の術が使える。アンピイに乗ればすぐなんだけど、王子が歩きたがったので今日は徒歩だ。

王子は楽しそうに、先に進んだり、私の所まで戻って来たりしている。身分の関係で、離宮の外にはそうホイホイとは出られないものね。

「毎日よく動いておいでですから、かなり体力がつかまりましたね」
カザムさんが王子に優しい視線を向けている。

「そうですね。あまり風邪を引かないのも、そのおかげかな」

私もうなずいた。王子ってば動いてばかりでエネルギーを消費するからか、幼児の割になかなか太らずスリム体型なんだけど、背はすくすくと伸びていて嬉しい。

それにとっても優しい子に育っていて、乳母としては本当に、嬉しい限りです。

「コウメ、これあげる！」

小さな手で、プレゼントもくれるし。……小石だけど。子どもっていつの間にか、石や木の実でポケットを一杯にしてるよね……

開けた草地に出ると、ラズトさんが白衣の左の袖をまくって腕を出した。腕には刺青のように、緑色の文字が螺旋状に刻まれている。

ラズトさんが右手でその文字をなぞると、螺旋はふわりとほどけて腕から浮かび上がった。そして、ラズトさんの手首を囲むように一つの円になって、ゆっくりと回転し始めた。これが術円、というものだ。そして、円を形作っている文字を「星心印」という。

この「星心印」は人間が作った文字ではなく、神さまから授かった文字だ。書くのがものすごく難しい代わりに、子どもでもまるで絵を見るように意味を読み取ることができ、不思議な表意文字。この文字を使った術が「星心術」、そしてラズトさんみたいに「星心術」を使うことのできる専門家のことを「星心術士」、というわけ。

ラズトさんの指が術円の中のいくつかの印を弾くと、文字の連なりの一部が地面に降り、円い転移陣になった。

「それじゃ、行つてきます！」

付き添いの護衛士からカザムさんが荷物を受け取る横で、私は挨拶する。王子も「いっ

てきまーす」と手を振った。護衛士の一人は普段から王子にメロメロで、うっかり手を振り返してもう一人に小突かれ、慌てて正式な礼をした。

笑っているうちに、あたりが白い光に包まれ――

――一瞬後には、王都を望む丘の上まで転移していた。

私が乳母として王城から離宮へ赴任する時も、そういえば車でこのあたりまで移動して、それから離宮に飛んだっけ。普通に車に乗って移動すると半日かかるので、小さい子どもも一緒だし助かるなーって思ったんだよね。

懐かしく思い出しながら、私たちは待機していた車に乗せてもらい、護衛士の一隊に守られて出発した。王都の玄関口に当たる場所には、二つの巨大な風車塔がそびえ立っている。そこから続く街並みのずっと奥に、柔らかなグレーのお城が小さく見えていた。

王城の玄関にあたる大きな吹き抜けのホールには、巨大な螺旋階段がある。その下で、国王イシユデイル陛下の侍従長さんが出迎えてくれた。王子が「こんにちは！」と元気に挨拶すると、初老の侍従長さんも笑顔になる。

「王子殿下、ようこそお戻りになりました。お父上もお母上も、お待ちかねでございま

すよ」

「お部屋で着替えたら、すぐにご挨拶に伺いませよ」

私は王子に声をかけ、侍従長さんに見送られて、まずは西の宮に向かった。そこに、城を訪れたときに王子が滞在する一角がある。

もし王子が第二夫人の実子として育っていたら、ここを王子と一緒に心穏やかに歩くことなんて、とてもじゃないけどできなかっただろうな。

私は豪華な装飾の施された廊下を歩きながら、そんなことに思いを馳せ始めた。

ウイオ・リゾナ王国には、男子が王位を継ぐという伝統がある。でも、第一夫人は王女さまを一人授かったのみで、男子は授からなかった。そして数年後、世継ぎを儲けるために第二夫人ソラミーレさまが迎えられることになったんだけど、そのソラミーレさまが授かったのも、王女さまだった。結局、第一夫人の娘の第一王女さまが王族からお婿さんを迎え、その人が王太子さまとなった。

その直後、ソラミーレさまが第二子を授かったんだけど、その子は出産時に亡くなってしまった。悲しむソラミーレさまのためにイシユディール陛下が養子を探し、そうして引き取られたのが、私がお世話している王子なのだった――

――というのが、表向きの話。

事實はこうだ。第二子を妊娠して以来、ソラミーレさまの周囲では不穏な出来事がいくつも起こり始めた。ソラミーレさまが怪我をするように仕向けられたり、生まれる予定の子どもの乳母候補に身元の怪しい人がいたり。

もしお腹の子が男の子だったら王太子の座を奪われるのでは……そう危惧した王太子周辺の人々が、お腹の子の命を狙い始めたんだろうということ、この頃は王太子派と第二夫人派はずいぶんとギスギスしていたみたい。

そうまでして我が子に王位など望んでいなかったソラミーレさまは、生まれた子を死産したことにして密かに逃がし、*星の庭*と呼ばれる場所に隠した。

星の庭 というのは、無垢な子どもや動物たちと神さまが触れ合う場所、と言われてる。成人した人間が入ろうとするとほじき出される、不思議な場所だ。つまり、王子を狙う人は入ることもできないわけね。まあ、大人のいない場所に新生児がいるなんて、誰も思わないだろうけど。そしてもう一つ、ここには不思議なエネルギーが満ちていて、生き物は普通より早く成長するのだ。

そんな *星の庭* に入れる唯一の大人が、この世界の人間ではないこの私だった。そんな事情で、私が *星の庭* で密かに王子のお世話をするようになったのだ。

通常より早く成長した王子は、本当は当時一歳未満のところを三歳という風に年齢を偽り、養子として王家に引き取られた。普通は養子って言ったら、実の子どもではない子を引き取って実の子のように育てるものだよ。王子の場合は、実の子を養子として育てるといふ正反対の方法が採られたわけ。王位継承権を持たない子として、安全に暮らすために。

現在は四歳ということになっている王子はまだ小さくて、その辺の事情はわかっていない。でも、本当の両親の子として暮らせる上に、命を狙われる危険がなくなった王子は、こうして城の中をスキップして歩けるようになったのだ。

あと一つ渡り廊下を渡れば、王子が滞在する一角に到着する。

というところで、急に庭園の方から転がりこんで来るものがあつた。

「あつ、ボール！」

王子が張り切つて取りに行こうとするのを、カザムさんがやんわりと、でも素早く止める。侍女のローレンが進み出て、それを拾い上げた。ボールと言うより「鞠」と呼びたくなるような、革製で刺繍入りのきれいなボールだ。

誰のかな、と庭園に目を向けると、女の子が一人駆け寄つてきた。後ろから、三十代

後半くらいの女性ももう一人、急いでついてきている。

「失礼いたしました……まあ、王子殿下でいらつしゃいますか？」

サツと頭を低くした女性は、ブラウスに紺のジャンパースカート、頭にはレースのボンネットをつけている。普段の私と同じ服装ということは、乳母さんだろう。

その前に立った女の子を見て、一瞬ドキッとした。末の妹の七緒と、同じくらいの年頃の子だったのだ。八歳とか、九歳くらいかな？

「あなたが王子さま？」

王子をじーっと見る彼女に、乳母さんが少し声を低めて「そうですよ、ご挨拶を」と促している。

「こんにちは！ オージです！」

先に王子がニコニコと挨拶すると、女の子はクールに「ふーん」というような表情で、スカートをつまんでさらりと淑女の礼をとった。

「カティア・メゼックです。ごきげんよう」

か、かわい！ 小さなレディだわ！

王子の後ろで返礼しながらも、ついつい観察してしまう。シックなワンピースは、ベージュ地にボルドー色の縦ストライプの入ったパフスリーブ。白い靴下に茶色の革靴を履

いた彼女は、ローレンが膝をついてボールを差し出すと「ありがとう」と言って受け取った。豊かな赤毛を顔の周りだけ編み込みにして、後は後ろに垂らしている。

ん？ メゼック？

「コウメ、あそぶ！ カリアとボールであそぶ！」

王子にスカートを引つ張られて、我に返った。

「あ、王子、でも陛下とソラミーレさまが王子に会いたいって待ってらっしゃるし」
私が言うと、むー、と王子も眉間にしわを寄せて考え込む。

「はうえ……でもボール……むー」

「まあ王子さま、ありがとうございます」

カティア嬢の乳母さんが、腰を低くしたまま一歩前に出た。

「私たちは明日も、この時間はこのあたりにおりますので、よろしければ」

「あ、ありがとうございます。城に到着したばかりで、まだ予定が立っていないんですけど、もしお時間が合いましたら是非お相手をお願いしますね！」

私はそう返事をしてから、王子にも言った。

「王子、ソラミーレさまにもお聞きしてみましょ。ね」

「うん」

王子はソラミーレさまの名前には弱い。素直にうなずくと、

「またね！ さよなら！」

と手を振って、廊下を先へと走り出した。ローレンが急いでついていく。

「それじゃ、失礼します」

私も挨拶をすると、後を追った。

西の宮に入り、カティア嬢の姿が見えなくなると、私はカザムさんとラズトさんに話しかけた。

「メゼック家って、前に話して下さった……？」

カザムさんがうなずき、ラズトさんも「そうだ」と軽くため息をつく。

やっぱり、あの……

私は複雑な気分で、何やらローレンに話しかけている王子の後ろ姿に目をやった。

王太子派と第二夫人派が対立していた時に、こっそりと立ち回ってこの二派の対立をさらに煽り立てて潰し合うように仕向け、自分たち一族の台頭を目論んでいた貴族——それが、メゼック家なのだ。

メゼック家はウイオ・リゾナの筆頭貴族で、いくつもの要職に名を連ねており、国政にも意見できる立場にある。その立場を利用して王太子派に近づき、王子の暗殺をそそのかしていた……らしい。

らしい、というのは、怪しい話をたどっていくとメゼック家周辺には行き着くものの、物証はなく罪に問えないのだそう。

彼らは言葉巧みに人を扇動するものの、自分たちの手は汚さない。確実に犯罪を遂行するのではなく、うまく行けばめつけもの、というスタンスなわけ。おまけに自分たちの仕事はきっちりやるから、どこからも文句は出ない。

もし王子が暗殺されていたら、それが王太子の仕業だと糾弾して廃嫡に追い込み、新たな王太子にメゼック家の人物を据える——最終的な目標はそこにあつたのだらうと、ソラミーレさまが話して下さったことがある。

「陛下と私の結婚が決まる前にも、ずいぶんあちこちから妨害が入るわねえと思っていたら、いつの間にかメゼックの一族の娘さんが第二夫人になるべきだ、っていう風に根回しされていたわ。ま、陛下はよそ見なさらなかったし、世論が『庶民の声を王家に届けよう!』という感じに盛り上がって私を推してくれたから、大丈夫だったけどね」

庶民出身のソラミーレさまはあつげらかんとおっしゃっていたけれど、自分のことはともかくお腹にいた王子を狙われた時には、ずいぶんと参ってしまったと聞く。彼らは王太子さまの仕事にも何やら横槍を入れていたそうで、王太子さまもおちおち城を離れられないくらいだったとか。私はその辺の事情を知った頃には、事態はずいぶん落ち着いていたみたいだったけど。

とにかく、メゼック家の目論見は今のところ失敗していて、王太子さまは王太子のままだし、王子も無事。まだまだ気は抜けないけどね。そしてさっきの女の子は、そんなメゼック家に連なる子らしい。

「どんな立場の子なんだろう……」

つぶやいた時、脈絡を一切無視した声が出た。

「コーメ！ 私を呼んだかい？」

柱の陰からサツと現れ、私の片手と腰をとらえてダンスみたいにくるりと一回転したのは、ソラミーレさまの弟のファシードさんだった。

ソフトモヒカン頭におしゃれ髭がお似合いのファシードさんは、今日は腕まくりしたシャツに革のベストという比較的ラフな格好。ボタン三つ分はだけた胸元から細いチエーンのネックレスが見えている。

「わっ！ ファ、ファシードさん!? 久しぶりにお会いできて、えっと、お呼びしてはいないですけど嬉しいですよ」

軽く振り回されてから解放された私は、目を丸くしつつも挨拶(?)する。ファシードさんはここ一ヶ月ほど、仕事が忙しかしいのか離宮に姿を見せていなかったのだ。

「そうかい？ 私の出番かなと思ってるね。東の方の話だろう？」

「はちどー！」と駆け寄ってくる王子を軽々と抱っこしながら、ファシードさんは少し悪役っぽい笑みを浮かべた。

「東……王都の東に領地を持つ、メゼック家を指す隠語。」

あ、そうか。ファシードさん詳しいんだ。

貿易会社社長のファシードさんは、ウイオ・リゾナのあちらこちらで商売していることもあって、各地の情報に通じている。その立場を生かして、姉のソラミールさまの相談役みたいなこともしている。陛下とのご結婚の時に世論を盛り上げたって言うのも、ファシードさんの仕業なんだって。

それに、こうしてちよくちよく王城や離宮に現れては、甥である王子のことも構ってくれるのだ。いやもう、ホントに、ちよくちよく。シャチョーさん、お仕事大丈夫なんですかー？

「さっきの子は、メゼック家当主の姪だね」

部屋に入ると、ファシードさんは王子を下ろしながら言った。

「父親が国務に携わっているから、仕事についてきたんだろう。しかし、議員宿舎は城のずっと南側だが」

王城の敷地に入る際には、星心術を併用した身分チェックがある。敷地に入った後なら、王族のプライベートな場所以外は比較的出入り自由だ。でも、議員宿舎からわざわざここまで遊びに来るには、確かにちよっと遠いかなあ。

「王子殿下が通るあたりにまで足を延ばして遊んでいたということは、殿下に近づくために来たんでしょうか」

カザムさんが尋ねると、ファシードさんもうなずく。

「偶然でも何でも、オージとカティア嬢が出会って仲良くなれば、今後つながりができるからな」

私は注意深く、その話を聞く。

もし、メゼック家の大人たちがあの女の子を利用して、王子に悪い意味で近づこうとしているなら、私も乳母として気をつけなくちゃいけない。ただでさえ、王子は出自に秘密を抱える身だもん。

子ども同士が仲良くなるのはいいことであるはずなのに……こんな風に警戒しなきゃいけないって、残念だな。

「まあ、あまり気に病まないことだね。オージとカティア嬢が二人きりになるわけでもなし。コーメが私と二人きりになる方が、よほど危険だよ?」

ファシードさんが、するり、と指の甲で私の頬を撫でる。

「じゃ、じゃあ二人きりにならないようにしますねっ」

私は一歩飛び退く。

ファシードさんとのこんなやりとりも、すっかり予定調和っぽくなってしまった。いいのかしらこれ。

「コウメ、まだー?」

王子の声に我に返ると、彼はすでにローレンに着替えさせてもらっていた。早っ。でも、半ズボンにサスペンダー、小さな蝶ネクタイという王子さまらしい格好がとても可愛い。

「カティア嬢のことは、ソラミーレさまのお耳にも入れておくとして……とにかく、行こうか」

ラストさんが苦笑しながら言い、私はうなずいて王子に笑いかけた。

「ごめんね、お待たせ! 行きますよ」

「オージ!」

第二夫人の居間に入ると、ソラミーレさまが両手を広げて王子を迎えた。

「ははうえー」

王子はすぐにソラミーレさまに駆け寄ったものの、ちょっと手前で立ち止まって上目遣いでモジモジしている。「照れ」が入る年頃になったのか、それともソラミーレさまがお綺麗だから気後れしちゃったのかな? ドレスにいきなり飛びつくのも、なかなか勇気が要りそうだしね。

「ちょっと見ないうちに、また大きくなったわね!」

ソラミーレさまはそんな王子の様子も可愛いようで、軽く屈み込んで王子の頭やらほっぺやらを撫で回した。王子はくすぐったそうにしつつも、

「あのね、ぼく、ちっちゃいアンピイのれるよ」

と報告してソラミーレさまに褒められている。

王族や貴族の子どもは、両親と過ごす時間をあまり持たないのが普通らしい。子どもは乳母や家庭教師に世話させるのがステータス、みたいな感覚もあるみたいだけど、そもそも上流階級のお付き合ひのある両親は忙しくて、子どもの世話まで手が回らない。

ましてや国王夫妻をや、だよ。王子には、そんなご両親が眩しく見えるみたい。ソラミーレさまは庶民出身のお妃さまだし、本当はもっと王子と過ごしたい気持ちがあるのよ、しんどいものがあるだろう。

そんな母子が触れ合っている様子を見て、じわっと来るものを感じながらふと気づくと、扉の脇に立っているカザムさんが私を見ていた。

カザムさんが微笑み、私も笑みを返す。

ソラミーレさまが身体を起こすと、私を呼んだ。

「コーム、よく来てくれたわね！ 離宮で、何か不自由なことはない？」

「いいえ、ちっとも」

私も笑顔で答えた。

「離宮の皆さんは、本当に良くして下さいます。申し訳ないくらい。楽しく過ごさせていただけます！」

「ぼくとあそんでるから、たのしいよ！」

王子が横からそう言っ、ソラミーレさまは面白そうにお笑いになった。

「それなら良かったわ！ ふふ、おしゃべりもずいぶん上手になったのね」

こちらの世界の子どもは私の世界とは違って、^{星心印}から様々な情報をどんどん吸収するため、精神的な発達が早い……っていうのが私の印象だ。王子も言葉を発するようになってから、ものすごいスピードでおしゃべりが上手になっていつている。舌足らずの割に内容が濃い、っていう感じかな。

そこへ、国王イシユティール陛下がお見えになった。

金の巻き毛はライオンのたてがみのようにふさふさと輝き、まさに王者の風格。陛下の周りが、他よりもクリアに見えるような気さえする。これがオーラ、ってことなんだろうか。

スーツ姿の陛下は、挨拶をする私にうなずきかけた。それから、王子をひよいと片手で抱き上げる。夕焼け色の目を細めて、

「オージ、重くなったな！」

とおっしゃってたけど、大柄な陛下の腕に王子がちんまりと乗っている様子は大して重そうにも見えなくて、それがまた微笑ましかった。

夕食まで少し時間があるので、陛下が王子に私室を見せて下さることになった。王子は「王さまのお部屋」が見られるとあつてワクワクが隠しきれない様子。陛下も、

「そんなに面白いものはないぞ。……まあ、私が父から受け継いだ宝物くらいかな」
 なんてますます王子の期待を煽りながら、連れ立って居間を出ていかれる。王子つた
 ら、足が小躍りしてるわ。

カザムさんも、ソラミーレさまや私に会釈をしてから、王子について出ていった。

侍女たちも控えの間に出ていき、居間の扉が閉まった。部屋には、ソラミーレさまと私だけになった。

「ねえねえコーム！」

空色の瞳をキラッキラさせたソラミーレさまが、一気に砕けた雰囲気になる。

「なんかカザムといい雰囲気だったじゃない？ 今どうなってるの？」

キター。

そう、私が王子の乳母として離宮に行くことが決まった後、もともと王城勤務だったカザムさんが離宮勤務を希望したんだよね。その時に、何らかの会話がソラミーレさまとの間にあった……らしい。私はカザムさんから、「ソラミーレさまに『あらま、そういうこと？ 頑張ってるね』と言われた」としか聞いてないんだけど、まあその、私とカザムさんの仲についての話だったことは、いくら鈍い私でもさすがにわかる。

で、でもなあ。

「どうって、えつと……何もありません、すみません」

なぜかへこへここと謝る私に、ソラミーレさまは軽く目を見開く。

「何もって？ 何も？ え、なんにも!? まさかさつきみたいなの、目で会話してまんぞくーみたいなの、そんなアレ!?」

「はあ……そんなアレです」

な、何て言うか……一度だけ、ちょこつとだけだけど、キスしたのよね私たち。でもそれ以来、そういうことはなくて……私とカザムさんって、一体どういう関係なんだろう？

陛下やソラミーレさまには失礼かもしれないけど、私は王子を我が子同然に思っている。王子の乳母という仕事をしているけれど、お給料をもらっているから「仕事」と呼んでいるだけで、カザムさんが「星の庭」に迎えに来なければ、今でもお給料なんか関係なく、あの場所で王子を育てていたと思う。

そしてカザムさんもラズトさんも、離宮という王子の家で一緒に暮らす家族みたいなものだ。ファシードさんなんて、実際に王子の叔父さんだし。

待て待て。私、この世界で目を覚ましてみたら、いきなり赤ちゃんと一緒に寝てて、問答無用で育児を開始して。その後にかザムさんたちと出会って、家族みたいな仲間が

できて。それからその家族に恋？ 順番がまるつきり逆じゃない、これからどうすればいいってのよー！

「ちよつとー！」

ソラミーレさまは私をソファに座らせ、ドレスが私の膝に触れるくらいの距離で話す。普段は完璧なお妃さまをやっているソラミーレさまだけど、気の置けない一部の人の前ではこんな感じだ。

「もしかして、コーメ忙しすぎるんじゃない？ それで、カザムといちゃいちゃウフフする時間が取れないんじゃない？」

「いえいえいえいえ」

私は両手を車のワイパーみたいにざかざかと振った。か、顔が熱いつ。

「最近離宮での生活もずいぶん落ち着いたので、自分の時間は持てなくてもいいです、大丈夫です」

「じゃあ、カザムに休みを合わせてもらえば、二人で会えるんでしょ？」

「会ってます、会ってます。でも、お互いあまり踏み込んだ感じではなくて、その……ちよつとお茶したりとか？」

「えーっ、カザム何やってんのおー？」

不満そうにつぶやいたソラミーレさまの表情が、ふと変わった。

「コーメは、男性とお付き合いますときはいつもそんな感じだったの？ それとも、もしかして何か、気になることがある？」

心配そうに聞かれ、私は口ごもった。

気になることは、ないわけではない。

「……その……私、前にお付き合いました人と結婚することを、意識していたわけで、私ほもごもごと言った。

「実際にはそうならなかったわけですけど、どうしても次に誰かとお付き合いとなると、結婚するしないを意識しないわけにいかないというか」

はい。あまり思い出したくないんだけど、私には、くらいい過去があるのです。日本にいた時に付き合っていた彼に二股かけられた挙句、彼がもう一方の女性とでさちやつた結婚した、という過去が。

ソラミーレさまは口を開きかけたけれど、結局ただうなずかれた。

私は自分の手の甲を眺めながら、言った。

「年齢のこととか、私の職業のこととか、色々ありますけど。単純に、結婚について考えると、もやもやしてしまうんです。たとえ相手の男性と両想いでも、結婚という形に

なると、もう日本のことはどうでも良くてこっちで幸せになればそれでいいのか、みたいなの……私を心配している家族に対する、罪悪感、みたいなものでしょうか。うまく説明できないんですけど。こんな気持ちのままではいるくらいなら私、男性とは深いお付き合いをしない方がいいんじゃないかって。自分のためにも、それに相手の人のためにも」

「でもコーメ、それは……」
ソラミーレさまが何かおっしゃろうとしたとき、ノックの音がして侍女さんから声がかかった。来客があつたらしい。

「もう……せっかくコーメと二人だけなのに。しょうがない、ちょっと行ってくるか」
ソラミーレさまは小さくため息をついたけれど、優しく微笑んだ。

「勝手に、カザムとコーメはごく普通の幸せな恋人同士だと思いきんでいたけれど、そんな枠にはめちゃいけなかったかもしれないわね。もっと話を聞きたいわ。また時間を取ってくれる？」

「はい、喜んで」

私は立ち上がると挨拶をして、ソラミーレさまの居間を辞した。

廊下、と一言で言うには広すぎるその場所を進み、イシュディール陛下の私室のそば

まで行ってみる。控えの間の前に立っていた護衛士ゴウエイシさんに一言声をかけ、私は近くの客間で王子を待たせてもらうことにした。今は父子水入らずの時間だろうから、邪魔したくなかったのだ。

客間はいつでもお客様をお迎えできるよう、綺麗に手入れされている。風を通すためか、胸の高さの窓が外に向けて開かれていた。私は室内を乱さないよう、まっすぐ窓に近寄ると、窓辺に寄りかかって外を眺めた。美しく彩られた庭園と、その上を飛び交う鳥たちが見える。

さつき、ソラミーレさまと話したことを考えた。

ちゃんと付き合ってもいけないのに結婚について考える女なんて、男性にとっては煩わしいだけだろうなあ。でも、私には私の事情がある。元恋人のこともそうだし……それに、そう、私が王子の乳母うっぱであることも。

子どもを持たない人が乳母になるのは、珍しいけれどないことでもないと聞いたので、そこは気にしていない。日本にだって保育士さんという保育のプロがいるし、こちらでも乳母というのは立派な職業だ。そして乳母が保育士さんと違うのは、本当の親に準ずる立場である、ということ。

……その立場で、誰かと結婚するのって、なんだか変な気がするし聞いたことがない。

だって、貴人の子を預かる乳母が、よからぬことを考えてる男と結婚しちゃったらどうするの、って話だもんね。

そこまで考えて、私は首を横に振った。

違う違う、乳母の立場があるから結婚しない、っていうのはただの言い訳。

私自身が、誰かと結婚したいと思っていないのだ。

さっきも思った通り、王子とは家族同然。私にとって乳母の仕事は生活そのもので、それを一番大事にしたいしそれで精一杯だもん。ソラミールさまに話した、罪悪感のことだって大きい。日本にいるならともかく、結婚しない自分を想像する方がホツとする。少なくとも、今は。

カザムさんとキスしたのは、すごく嬉しかった。思い出すとキヤーツってなって転げ回っちゃうくらいだ。でも、もしカザムさんに、私にはない結婚願望があったら……。今は私に好意を持ってくれているとしても、時間が経てば結局、前の恋人のように他の女性と……

やっぱり、ダメだ。私の方から、カザムさんに慣れ慣れしく近づくんってなんてできないよ。

過去の痛みはたやすく胸に甦る。私はそれを逃がそうとして、短いため息をついた。

そのとたん、まるで計ったかのように、まばゆい光が部屋に飛び込んできた。白く長い光が、流星みたいに尾を引く。

「あっ……カザプカ！」

私は声を上げた。

飛び込んだきたのは、神の遣いと言われる鳥カザプカ。私に名前の印を授けてくれ、また私の心をほんのひととき日本に連れて行ってくれた鳥だ。

そして――

カザプカは私の頭上を旋回し、白くて平べったいものを私の手の中にぽとりと落とすたのだ。

「七緒からだ……！」

それは、封筒だった。表に、**星心印**で私の名前が書いてある。日本にいる、妹の七緒からの手紙だ。

カザプカだけは異なる世界へと渡ることができるようで、不慮の事故でこちらの世界に迷い込んだ私を憐れんでか、こうして橋渡しをしてくれる。**星心印**で名前が書いてあれば、カザプカは手紙を届けてくれるのだ。

ただし、**星心印**には不思議な特徴があって、特殊な材質の紙（**星映紙**）と呼ばれ

ている)以外の紙に書くと、しばらくしたら消えてしまう。一度、七緒が自分の便せん
と封筒で手紙を書いたそうだけど、それは私には届かず、やりとりができなかったこと
があった。どうやら世界を渡るときにも、普通の紙に書いた「星心印」は消えてしま
うらしい。それ以来、こちらから手紙を出す時に余分に「星映紙」を送るようになった。

カザブカみたいな存在が一個人の周辺に何度も現れることは稀だそうで、何だか不思議。
ラズトさんは、

「コメだけでなく、オージの周辺によく現れる気がする。やはり「星の庭」で育ったつ
てことで、オージは特別なんだろうな。で、そのオージの母親代わりであるコメも助
けてくれる……のか?」

と首をひねっていた。

私は、こういう時のためにいつも持ち歩いている七緒あての手紙を、エプロンのポケッ
トから取り出した。表にはもちろん、七緒の名前の意味を表す「星心印」が書いてある。
差し出すより早く、カザブカは私の手元からさらうようにして手紙をくわえ、さあつと
窓から去って行った。

窓に向かつて「ありがとう!」と声をかけ、私はスカートの腰に下げている小さなは
さみ(エプロンの陰に、鍵や筆記具、文房具なんかを鎖で下げてあるのだ。乳母七つ道

具!)を使って、急いで七緒からの手紙を開封した。

四つ折りの便せんをそつと開くと、七緒の右上がりの文字が並んでいた。以前よりす
こし丸っこくなった文字が、女の子らしくなった七緒を見るようで、泣きそうになる。

手紙には、小学四年生になった七緒の日常が綴られていた。私は三姉妹の長女で、二
歳下の妹の小彩は結婚しているんだけど、七緒は今その小彩夫婦と一緒に暮らしている。
私たち姉妹には証券マンの父がいるけど、昔から家族というものが苦手な人だった。

きつと父自身、結婚して子どもができるまで、そのことに気づかなかったんじゃないか
と思う。父は、私が中学に上がった頃には単身赴任したままほとんど帰って来なくなっ
ていて、母が一人で会いに行くだけだった。そして私が十八歳の時、その母が亡くなっ
たことで、娘の私たちとも接点を失った。結果、私たち三姉妹の結束はより深まったよ
うな気がする。

特に、私と小彩を親代わりに育った七緒は、とても甘えん坊だった。そんな七緒も、
私が失恋して落ち込んでる様子を見せてしまつてからはあまり甘えないよう頑張つて
くれていたし、今も私がいなくても頑張っているのが手紙から窺える。

私が不思議な状況にあることは、カザブカのおかげでわかつてくれているようで、帰つ

て来て欲しいといったことは手紙には書かれていない。でも、「もうすぐ十歳になるから、学校で『二分の一人式』をやるんだよ。見せたいな」とか、

「遠足で山登りに行きました。彩姉が一人でお弁当を作ってくれたよ」

とか、文章の端々に寂しさをにじませている。そんな思い、させたくないのに……

頑張っている幼い妹に、そしてそんな七緒を支えるもう一人の妹に、遠く遠く離れたこの場所にいる私に何ができるだろう？

開け放した扉の向こうで、ガチャツ、と大きな音がした。陛下の私室の扉が開く音だ。はっ、と我に返り、手紙をたんでポケットにしまう。廊下に出ると、カザムさんと王子が出てきたところだった。

「コウメ！ ははうえはー？」

駆け寄ってきた王子を受け止めながら、私は微笑んで答えた。

「今、ちよっとお客さまとお話し中。お部屋で待ってれば戻ってらっしゃると思うわ、行きましょ」

手をつないで歩き出す。斜め後ろをちよっと見ると、カザムさんの制服の足が歩を運

んでいるのが見える。

今、目が合ってしまったら、心の内を見透かされて心配をかけてしまいそう。私は視線を上げないまま、王子の方を向いて尋ねた。

「お父上の宝物、見せていただいたの？」

「みた！ あのね、きれいな石！ いっぱいあったよ！」

王子は目をキラキラさせて報告してくれる。

石かあ。何せ国王陛下だもん、すごい宝石をたくさんお持ちなんだろうな。なんて思っていたら、王子はポケットに手を入れて中のもを出して見せた。

「いっこもなかった！ ありがとうしたよ」

「ももも、もらったあ!」

宝石をボンと息子にプレゼントとは、さすが陛下！

驚きながら王子に渡された石を見ると、それは灰色のゴツゴツした、道端に落ちていてもおかしくないような石だった。これを王子に……？

あ、でもよく見ると、角度によって透き通った緑に見える部分がある。

「ほえー、ここの緑の所、綺麗ね……」

思わず変な感嘆詞かたんしをもらしつつ、石を光に透かしながらつぶやく。私にとっては石と

言えば、王子がよく拾ってくるようなもののイメージしかなかったけど、こんなのもあるんだ。

カザムさんが笑いを含んだ声で教えてくれた。

「陛下は鉱物に興味がおありなんです。こういう石をいくつも、『宝物』としてお持ちなんですよ。これは先代の国王にいただいたものだそうです」

「そうなんだあ……」

自然にカザムさんと受け答えすることができた私は、「大事にしようね」と石を王子に返す。

「ぼくもきれいな石をみつけたら、ちちうえにあげようつと！」

王子は嬉しそうにそう言って、カザムさんにも石を披露していた。こりゃ、王子が石を拾ってくる量がまた増えそうね。

……もしかしたら、陛下も少年のような心で、石を愛でていらっしやるのかもしれない。いただいた石を見ながら、そんな風に思った。

翌朝、王子は王国恒久平和祈念の礼拝に出席するため、城の奥にある礼拝堂に入った。この世界の神である、ガデュオスの礼拝堂だ。

城の敷地内ではあるけれど、そこは木々に囲まれ、水の流れる清浄な空間。建物は石造りの円筒形で、天井はなくいくつもの出入り口が開いていて、城の中に住む動物たちが自由に出入りしている。

この空間そのものがガデュオスを、そして理想のガデュエリオンを表しているんだそう。ちなみに専門の「庭師」さんが管理している。

「星の庭」もそうだったけど、こちらの世界の「庭」ってすごく意味が広そう。単に植物などが整えられた空間、というだけじゃなく、庭そのものが儀式の場だったり、崇拜の対象に近いものだったりするみたい。

この礼拝は王家の人々だけが参加する特別なもので、王子にとっては初公務、ということになる。礼拝堂の周囲は、普段から城を守っている護衛士たちが警備するため、王子付きといえ離宮の護衛士であるカザムさんも立ち入れない。

礼拝が終わるのを待つ間、私とカザムさんは城の上階に行き、渡り廊下に設けられたバルコニーから緑に包まれた礼拝堂を見下ろしていた。

あそこに居並ぶ王族の中に、王子がいる。

私は嬉しくて、ちよつと涙ぐんでしまった。軽く鼻をすすって、ふと横を見ると、カ

ザムさんが私を見つめている。私はとっさに、
「王子、緊張でハイになってないといいけど」
と笑った。

「大丈夫でしょう。王子殿下はガデュオス神に愛されておいでですし、それを殿下も感じてらっしゃるようですから」

カザムさんが礼拝堂の方に目をやる。私もつられてもう一度見ると、いつの間にか建物の上を、カザプカが長い尾を引いて旋回していた。

離宮にも小さな礼拝堂があって、決まった日に礼拝をするんだけど、動物が自由に入りできるように礼拝中は窓や扉が開け放してある。王子が礼拝していると、よく動物たちがやってきては、まるで一緒に神さまのお話を聞いているみたいに寄り添ってるんだよね。

「良かったですね」

カザムさんの声に振り向くと、優しいダークグリーン色の瞳が私に微笑みかけていた。

「何の問題もなく、王子殿下が礼拝に参加されて」

「はい！」

私も、心からの笑みを返す。

礼拝に出席できたのは参加できる年齢に達したから、ということもあるけれど、王家の人間としてちゃんと認められてる、つまり養子とはいえ陛下とソラミーレさまの子どもだって認められてる証だもんね。

「何だかこう、一つの節目を迎えたハレの日、という感じがしますね！ 七五三みたいな」

「イチゴサン？」

軽く首を傾げるカザムさん。この日本語は発音しにくいみたい。

私は、子どもの成長をお祝いする行事について説明した。そういえば、こちらでは十歳前後で左手薬指に名前の「星心印」が現れるので、その時に似たようなお祝いをする」と聞いた。

……末の妹、七緒の、七歳のお祝いをしたのが、ついこの間のようだ。

私が七歳のときに祖母にあつらえてもらった着物は、二歳下の小彩も七歳の時に着て以来、大事にとつてあった。十六歳下の七緒も、それを喜んで着てくれたっけ。まあ、写真スタジオで自分で選んだ豪華ドレスを着たときの方が、テンション上がってたけど。

七緒と新婚の小彩夫婦は、幸せに暮らしているかな。そろそろ小彩にコウノトリが訪れるかも。甥っ子が姪っ子ができるなら、私も顔を見たいな……

「コーメ」

「あ、はい！」

はっ、と顔を上げる。いつの間にか、日本に思いを馳せていたみたい。

カザムさんが目を細めて笑った。

「今回の王子の節目を、離宮の皆もとても喜んでると思います。離宮に戻ったら、何か皆でお祝いでもできたらいいですね」

「わ、いいですね！」

私は軽く手を打った。

「王子がこうして立派に育ってるのも、離宮の皆の力あつてのことだし……その皆でお祝いできたら素敵。タヴァルさんに相談してみます」

タヴァルさんは離宮の責任者で、かつて王族の教育係を務めたことのある方だ。その職を引退された今は、奥さまで侍女頭のミレットさんと一緒に、シズ・カグナ離宮のあれこれを取り仕切っている。二人とも王子を孫のように可愛がっていて、今回のこともとても喜んでたなあ……もしかしたら私が言い出すまでもなく、もう何かお祝いを考えてるかもしれない。

カザムさんがバルコニーの手すりに両肘を乗せ、思いついたように言った。

「一番の功労者のコーデも、その時はドレスを着てみては？ ……きつと似合う」

「え」

どきっ、としたのもつかの間、

「見てみたいですね、コーデのイチゴサンドレス姿」

というカザムさんのセリフにずっこけた。

違うんだって。七五三のお祝いに出る人のドレスを全部七五三ドレス、って呼ぶんじゃないんですってば。うっかり、現在二十六歳の私がドレスにティアラに背中中のエンジェルウィングにレースの日傘かなんかのフル装備で写真を撮るところを想像しちゃったよ！ 最近の七五三写真はすごいからね！

「あの……何か違いましたか？」

大きな手で口元を覆うようにして目を泳がせているカザムさんの様子に、私は必死で笑いを抑える。

「いえ、あは、えっと、いいですねドレス！ 私もたまには華やかな格好をしてみようかな」

するとカザムさんは表情を引き締め、言葉を選ぶようにゆっくりと言った。

「そうですよ。……しんどいことや辛いことがあったとしても、それを上回るような楽しいことや幸せを、コーデは引き寄せることができると……俺はそう思います」

ああ、そうか、と私はカザムさんを見上げた。私が日本を想う時、どんな気持ちでいるのか、きつとカザムさんには伝わっているのだろう。その気持ちは決して消えることなく、ずっと抱え続けていくものだというのもその上で、私にこちらの世界で幸せになつてほしいと、カザムさんは願ってくれている。「私、今、幸せです。皆さんのおかげです」

私は笑ってみせる。

日本の家族に会えなくて辛いのは本当だけれど、優しい人々と一緒に王子を守る愛おしい日々が幸せなのも、本当なのだ。

幸せと不幸せは、パーセンテージの多い方に決まるものではないんじゃないかな。両方とも同時に私の中に存在しているけれど、辛いことが解決しなくても、大きな幸せがそれを包み込んで、支えてくれる。

この世界に来て最初に絆を結んだのが王子だったのは、きつと私にとって、良いことだったんじゃないかと思う。

「私が今、幸せなのは、もちろんカザムさんのおかげでも、あります」

伝えておきたくと言うと、カザムさんはまた、顔をほころばせた。

「これからもずっと、側で守りますから」

その声の調子と、二人の距離に、またあの夜を思い出した。

私が王子の乳母になることが正式に決まつて、城から離宮に向かうことになった日の、前の夜。カザムさんは城に残ると聞いていたので、最後に会いたくて。そうしたらカザムさんが会いに来てくれて――

私はとっさに、片手で自分の頬に触れて温度を確かめてしまった。……熱い。

うるたえて視線を泳がせたので、またもやカザムさんに心の中が伝わってしまったみたい。不意に手を取られて、抑えた声が耳元に降ってきた。

「……また、あの夜みたいな時間を、俺にくれますか？ コーメが、嫌でなければ……」

ほんの少し、罪悪感。

でも、カザムさんの真摯な瞳に吸い寄せられるように、うなずいてしまう。

「良かった。それじゃあ、その機会を楽しみにしています」

カザムさんはそう言つて、大きな硬い手で私の手を一度きゅつと握り、そつと離れた。

声の調子が、仕事モードに戻る。

「そろそろですね。下りてみましょう」

「あ、はいっ」

顔を上げると、いつものカザムさんだった。私たちは連れ立って、歩いていく。

ちらりと、隣のカザムさんを横目で見上げた。まっすぐ前を見て歩いてきたカザムさんが、私の視線に気づいて尋ねるように首を傾げる。

——カザムさんはあの夜、私のことをどう想ってるか、教えてくれた。そして今日も、同じ気持ちでいることを教えてくれた。

私、気持ちを受け取りっぱなしで、いいのかな……

礼拝堂の、開け放たれた両開きの扉から、イシユディール陛下が姿を現した。今日はスーツの上から重々しいマントや飾り紐をつけ、正装している。すぐ後ろから、やはりクリーム色のドレスで正装した第一夫人、そして王太子御夫妻も姿を現し、本宮の方へ肅々と移動していく。待ち構えていたお付きの人々が、すぐに後に続いた。

やがて、豊かな栗色の髪を結び上げティアアラをつけたソラミールさまが、小さなマントをつけた王子の手を引いて出てきた。すぐ後ろに、やはり正装の第二王女ハルリアさま。ハルリアさまは近く、王族の籍を離れて降嫁こうかなさることが決まっているので、これが最後の公務になる。

王子はすぐ、私とカザムさんに気づいた。

「コウメー！」

駆け寄ってくる王子を、膝をつき両手を広げて受けとめる。

「お帰りなさい！　ちゃんと静かに祈りできましたか？」

「できた！」

「よくできましたねー」

髪を梳すくようにして頭を撫なでると、王子はニコニコと言った。

「ごはん食べたなら、きのうの子とボールであそぶ！」

おおっと、いきなりそれですか。すっかり覚えてたのね、王子。

私がソラミールさまを見ると、すでに昨日のことをご存知のソラミールさまはうなずいた。

「子ども同士で遊ぶ分には構わないわ。でも大人が近づくと心配ね。コウメ、カザム、

目を離さないで」

「はい」

「はい」

私とカザムさんは声をそろえて返事をした。

昨日と同じくらしい時間に、西の宮に入る渡り廊下の横の庭園に行ってみると、カテ

イア嬢とその乳母さんはもう来ていた。

「どうやらかくれんぼの真っ最中らしく、向こうの方で乳母さんがキョロキョロしていて、カティア嬢は植え込みの陰に身を潜めている。でも、こちらからは丸見えだ。」

「カリアおねーちゃん、あそぼー！」

王子が早速、自分のボールを手に駆け寄っていくと、彼女は慌てて振り向いて指を一本立て、「シート」という仕事をした。この辺は日本と同じなんだなあ。

「お嬢さま、見つめましたよー。王子殿下、ご機嫌いかがですか？」

乳母さんが小走りにやってきて、膝を折って挨拶する。

「もーっ。見つかったじゃないの」

頬を膨らませるカティア嬢は、乳母さんがたしなめるのを軽く横目で眺めて流し、

「それじゃ、今度はオージさまが見つける番よ」

と言うなり庭園の中央の方へダッシュで走っていった。

話し方はクールなのに、熱くなると没頭するタイプなのかも……と思わず笑ってしまっ。

王子は小さな両手で目を塞いで、歌を歌い始めた。

「アンピイは走るよもりのなか、ティンプはのぼるよ木のあなに、ポステはだれかの肩

のうえ、カリアはカリアはどこっかな」

こちらの子どもがかくれんぼの時に歌う歌で、動物の名前がいくつも入っている。最後に見つけない子の名前を繰り返して、歌い終えたら搜索開始だ。王子が走り出し、カザムさんも距離を置いて後をついていく。

「あの、昨日はバタバタとしてしまって申し訳ありませんでした。王子殿下の乳母の、小梅と申します」

私が挨拶すると、カティア嬢の乳母さんは私にも膝を折って挨拶してくれた。

「とんでもないことでございます、こちらこそ昨日は失礼いたしました！ ザカーク・メゼック卿の娘カティアの乳母をしております、ユミリと申します」

私たちは左手の薬指の指輪を外し、指に刻まれているお互いの名前の「星心印」を見せ合った。名前の印は身分証明の代わりになるので、相手に信用してほしい時などは見せ合うのが礼儀だ。名刺交換みたい。

名前の「星心印」は、こう言っちゃ何だけれども便利なものだ。日本で言う指紋認証みたいな役割まで果たすことができる。左手の薬指に刺青のように刻まれているので、印鑑のように他人が使うことができないし、しかも指紋と違って普通の人も、見るだけで読みとれる。とはいえ絵と同じようにパッと見て覚えて再現することはできないし、

偽名を身体に刻もうとしても刻めないし。

「卿のお仕事に同行なさったのですが、遊び相手がいなくてつまらなそうにしておいで……まさか王子殿下とお会いできて、遊んでいただけなんて」

ユミリさんは胸の上で両手を重ねて、感激のあまり、といった風なため息をつきながら満面の笑みを浮かべた。

うーん。昨日ファシードさんが言っていたように、カティア嬢と王子を近づけてつながりを得ようとメゼック家の大人たちが画策しているんじゃないか、という話が本当なら、ユミリさんのこれは演技ってことになる。

どうしよう、知らなかったらそんなの見抜けないよ。せめて話を注意深く聞いて、表情もよく見て、少しでも違和感があったら後で調べることにしよう。それに必ず誰かもう一人、一緒にいてもらった方がいいかな……

自分で対処しきれないことは、手遅れになる前に他の人に頼った方がいい。生まれ育った日本ではないこの世界で、大きな仕事を任されている私は、そのことはいつも肝に銘じていた。もちろん、心強い仲間がいてくれてこそだけだ。

「もう！ 信じられない！」

そんなことを考えながらユミリさんと天気の話なんかしているうちに、あつと言う間

にカティア嬢が戻ってきた。

「ど、どうなさったんですか？」

王子が何かやらかしたのかと、驚いて目線を低くして尋ねる。ユミリさんも、カティア嬢が失礼なことを言うのではと思ったのかハラハラした様子で、同じように屈む。

カティア嬢は頬を膨らませた。

「オージさま、手下を使つてずるいわ！」

「手下？」

顔を上げてみると、王子がこちらに駆け戻つてくるところで……

足下を小動物が数匹ちよろちよろ、そして頭上を二羽の小鳥が抜きつ抜かれつついてきている。

「あの子たちに私を探させたのよっ」

カティア嬢が動物たちを指さした。

「あー私もやられたことある……いえ、あの、ごめんなさい」

私は慌てて謝った。

この世界は地球よりも、人間と動物たちの距離がずっと近い。愛玩用として動物を飼うことはないけれど、手紙を運んでくれる鳥ポストや人々の移動手段になってくれるア

ンピイなど生活の中に動物がいて、他にも野にいる動物と何かと触れ合う機会がある。あちらが人間に興味を持っているみたいで、人間に近寄ってくるのだ。こっちからぐいぐい近寄ると逃げちゃうんだけどね。

その中でも、王子は特に動物に好かれている。どうやら、かくれんぼでカティア嬢が隠れていた場所を、動物たちが王子に教えてしまったらしい。私もそれで見つかったことがあるんだ。

「ごめんね！ 今度はぼくがかくれるから、みんなはカリアと一緒にさがすんだよっ」

王子は両手に抱えたイタチ系の動物ティンブにそう言うと、ぽいっとカティア嬢に放り、また走っていった。

「えっ、ちょっと」

とつさにティンブを受け止めたカティア嬢は焦っていたけど、私とユミリさんが、「アンピイは走るよ森の中」

とかくれんぼの歌を歌い始めると、しぶしぶ目を閉じて唱和しょうわ。そして歌の最後の、

「オージさまオージさま、どーこっかな」

の部分の歌い終わるなり、腕から飛び降りたティンブと先を争うようにして走り出した。

やがて、「みーつけた！」の声が聞こえてきた。大きな木の幹の陰から、王子とカティア嬢が飛び出してきて、木の周りをぐるぐる回って追いかけてこを始める。

気がつけば、その木の枝にはカザプカの白い姿があった。足を止めた王子が、カザプカを指さして何かカティア嬢に言っている。紹介してるのかな。

その様子を見ていて、ふと思いついたことがあって、私はちょっと笑ってしまった。

カザプカでもしかして自分のこと、王子を守る仲間たちのメンバーだって思ってるんじゃない？ だって王子は、普段は神さまと動物たちしかいない、星の庭で育った初めての人間だもん。だから、やっぱりそこで暮らしていた私のことも、助けてくれるんじゃないかな。家族の一員みたいな感じで。

カザプカが家族なら、どんなポジションだろう。おじいちゃん？ なんてね。

そうこうしている間に、王子とカティア嬢、それに動物たちで大運動会が始まった。庭園に笑い声が飛び交う。

その風景は私に、七緒のことを思い出させた。

王子は生まれてしばらくの間、私が、星の庭で育てたけれど、表向きには、星の庭ではなく大陸のとある場所で、私の家族と一緒に育ったことになっている。私の家族——つまり、妹たちと、だ。

王子とカティア嬢と一緒に遊んでいるのを見てみると、もし王子と七緒が一緒に育っていたらこんな感じだったんだろうなあ……と、つい考えてしまうのだ。

このまま二人が仲良く大人になれば、陰謀みたいなこと気にしなくて済むのに……

王子は五泊六日の予定で、王城に滞在することになっていた。初めてカティア嬢と遊んだ翌日も、二人は庭園で待ち合わせて仲良く遊んだ。

四日目は陛下やソラミーレさまとの用事があつて遊べなかったけど、五日目もカティア嬢と遊んだ。カティア嬢は九歳だそうで、そろそろ名前の印を得てもいいくらいの年齢のお姉さんだけど、王子とはとても気が合うようだ。

「お嬢さま、王子殿下は明日、離宮にお戻りになるんですって。ご挨拶を」

五日目の夕方、乳母のユミリさんに促されると、カティア嬢は不機嫌な表情になってしまった。彼女はあと数日城に滞在し、お父上の出席する晩餐会と一緒に出席してから領地に戻るそうだ。その間の遊び相手がいなくなってしまうのが寂しいのだろう。

それでも、再度ユミリさんに促されると、カティア嬢はしぶとといった様子で言った。「また、会えたら遊んであげ……遊びましょうね」

「うん……」

王子もつまらなそうに口をとがらせた後、いいことを思いついたように言った。

「コウメ、ぼくカリアのおうち行きたい！」

「お、王子」

私は困ってしまったけれど、とにかくこう言った。

「カティアさまのおうちかはわからないけど、また一緒に遊びたいね。ソラミーレさまやユミリさんと相談しておきますね」

「はあい……」

うなずいた王子は、カティア嬢とユミリさんに手を振り、夕陽に染まる庭園を二人が立ち去っていくのを見送った。

二人の姿が見えなくなり、私と王子、そしてカザムさんは、ソラミーレさまの部屋に向かうべく歩き出した。

王子は楽しそうに、「カリアはアンピイにひとりでのれるんだって」とか「ふえを上手にふけるんだって」などとカティア嬢の話をしていたけれど、急にぶつりと黙りこんだ。

あれ？ と、歩きながら軽く屈んで顔を見てみると、半目になっていた王子はびたつと足を止める。

「だっ……」

あらあら。楽しく遊んでいる間はハイになってたけど、実は疲れていることに気づいたみたい。王子は糸が切れたように、私の足にもたれてぐずりだした。

「殿下、さあ」

カザムさんが屈みこみ、王子に背中を向けた。王子がその背中にこてんと身体を預ける。「あ、カザムさん私が」

私はちよつと慌てた。

護衛が任務のカザムさんは、何かあったらすぐに対処できるように手を空けておかないといけないはず。抱っこは私の役目だ。

「ここなら大丈夫です、他の護衛士ゴウベシの目が光ってますから」

カザムさんは王子を揺すりあげながら立ち、視線を巡らせた。その視線を追うと、確かにこのあたりは陛下のお住まいの区域だけあって、護衛士があちらこちらに立っている。

視線を戻した時には、王子はもう目をつぶっていた。

「寝ちゃった……すみません」

歩き出すカザムさんについていきながら、ちよつと申し訳ない気分になっていると、

カザムさんはどこか嬉しそうな笑みを見せた。

「俺はいつも、すぐに武器を取れるように、殿下に触れることなく守っていますよね。でも、こうして殿下が安心して身を預けて下さると、これはこれで殿下を守るといふことなのかな……と思います。俺はこういうのも、とても好きです」

そして、あ、と付け加える。

「好き嫌いで仕事を捉えるという意味ではないですけど」

「わかってます。ふふ」

私が笑って答えると、カザムさんは前を向いたままつぶやくように言った。

「その人が必要としている方法で守る、というのは、とても難しいな」

そして私を見て、またちよつと微笑んだ。

「そう、そんなに仲良くなったの」

カザムさんと私から報告を聞き、ソラミーレさまは綺麗な指先を顎あごに当てて考えを巡らせていらつしやる様子だ。

「それなら、せっかくだからお付き合いを継続したいところね。これでまた何年も会わなくなつて、それからまた仲良し……というのも、男女の違いもあつて難しいでしょう